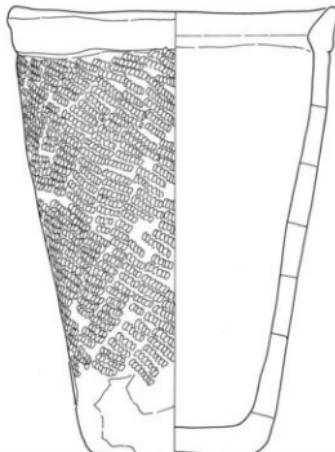


茨城県稲敷市  
沼田貝塚  
発掘調査報告書

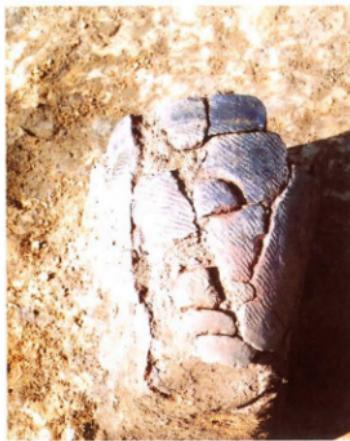


平成22年6月

株式会社 NTTドコモ  
有限会社 日考研茨城  
稲敷市教育委員会



沼田貝塚調査区全景

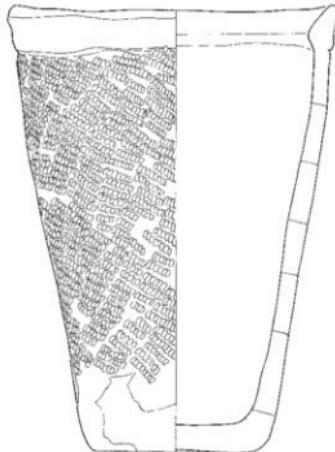


有段竪穴建物S103遺物出土状況



有段竪穴建物S103出土土器

茨城県稲敷市  
沼田貝塚  
発掘調査報告書



平成22年6月

株式会社 NTTドコモ  
有限会社 日考研茨城  
稲敷市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、株式会社 NTT ドコモの計画した携帯電話基地局建設事業に伴う、茨城県稲敷市沼田字神田2077番6所在の沼田(ぬまた)貝塚の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社 NTT ドコモ 茨城支店の委託を受けて、稲敷市教育委員会の指導のもと、有限会社日考古研茨城が行った。
3. 発掘調査は、平成22年3月1日～3月31日まで行い、同年4月1日から6月28日まで整理作業を行った。
4. 発掘調査組織は、下記の通りである。

調査担当者	遠藤 啓子〔(有)日考古研茨城〕	現地・整理
現地調査指導	大渕 淳志〔(有)日考古研茨城〕	現地・整理
整理調査指導	小川 和博〔(有)日考古研茨城〕	現地・整理
現地調査作業員	小野 豊、露久保三郎、谷中昌、佐賀実、友部政夫	
整理調査作業員	大渕由紀子、大野美佳〔以上(有)日考古研茨城〕	
事務局	(有)日考古研茨城	
調査指導	稲敷市教育委員会・人見暁朗・鈴木美治・松浦敏	
5. 本書の編集は、小川和博が行った。
6. 本書の執筆は、小川和博・大渕淳志・遠藤啓子が行った。
7. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。また調査においては世界測地系に基づく座標および水準点を設置し基準とした。
8. 遺構の略称に使用した記号は、以下の通りである。

堅穴建物・有段堅穴建物	S I	土坑	SK	溝	SD	柱穴	P	擾乱	K
-------------	-----	----	----	---	----	----	---	----	---
9. 本書中の色調に関する表現は、新版標準上色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。
10. 遺構および遺物の写真撮影は、大渕淳志・遠藤啓子・小川和博が行った。
11. 記録および出土遺物は、稲敷市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）

茨城県教育委員会、(財)茨城県教育財團、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、  
(財)千葉県教育振興財團

## 本文目次

### 例言

第Ⅰ章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第3節 調査日誌 .....	2
第4節 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	2
第1項 遺跡の位置 .....	2
第2項 周辺の遺跡 .....	2
第Ⅱ章 検出された遺構と遺物 .....	9
第1節 概要 .....	9
第2節 基本層序 .....	9
第3節 検出された遺構と遺物 .....	10
第1項 竪穴建物 .....	10
第2項 有段竪穴建物 .....	10
第3項 土坑 .....	13
第4項 溝 .....	13
第5項 柱穴 .....	15
第6項 遺構外出土遺物 .....	19
第Ⅲ章 まとめ .....	21

## 挿図目次

第1図	沼田貝塚周辺地形図 (1:2500)	3
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25000)	5
第3図	遺構配置図	8
第4図	基本層序	9
第5図	竪穴建物S I 01実測図	10
第6図	竪穴建物S I 02実測図	12
第7図	竪穴建物S I 02出土遺物	12
第8図	有段竪穴建物S I 03実測図	14
第9図	有段竪穴建物S I 03出土遺物	15
第10図	土坑SK01実測図	16
第11図	土坑SK01出土遺物	16
第12図	土坑SK02実測図	17
第13図	土坑SK02出土遺物	17
第14図	溝SD01実測図	18
第15図	溝SD01出土遺物	18
第16図	溝SD02・03実測図	18
第17図	柱穴P-1・2・3・4実測図	19
第18図	遺構外出土遺物	20
第19図	沼田貝塚近景写真 (『江戸崎町史』より)	21

## 原色図版

巻頭図版 沼田貝塚調査区全景 有段竪穴建物S I 03遺物出土状況  
有段竪穴建物 S I 03出土土器

## 写真図版目次

PL.1	1. 遺跡遠景 2. 調査区全景 3. 基本層序
PL.2	1. 竪穴建物S I 01 2. 竪穴建物S I 02・有段竪穴建物S I 03 3. 有段竪穴建物S I 03出土遺物 4. 竪穴建物S I 02・有段竪穴建物S I 03掘形
PL.3	1. 土坑SK01 2. 土坑SK02 3. 溝SD01
PL.4	1. 溝SD02 2. 溝SD03 3. 柱穴P-1 4. 柱穴P-2 5. 柱穴P-3 6. 柱穴P-4
PL.5	出土遺物 S I 02・03 SK01・02
PL.6	出土遺物 SD01 表探資料 沼田貝塚出土貝類 (表探資料)

## 表 目 次

表1	沼田貝塚と周辺遺跡一覧	6
表2	福敷市貝塚地名表	22

## 第Ⅰ章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成21年10月7日付けで、エヌ・ティ・ティ・ドコモ茨城支店（以下「エヌ・ティ・ティ・ドコモ」）より携帯電話基地局建設に伴い、稲敷市教育委員会（以下「教育委員会」）に対して、稲敷市沼田字神田2077番6地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会がなされた。当該地は周知の遺跡である沼田貝塚が所在していることから、教育委員会は遺跡の状況を確認するため、同年10月16日に現地踏査を実施した。事業予定地には土器破片等が小量確認された。この結果を基に同年10月28日、教育委員会は事業者立会の下試掘調査を実施した。バックホウ(0.4)を用いてレンチ試掘調査を行った。

事業予定地の約55%にあたる80m<sup>2</sup>を、現状の地盤から40cm～50cm表土を除去したところで遺構検出面を確認した。試掘調査の結果、事業予定地内からは、住居跡状遺構3・土坑状遺構2・溝状遺構2が確認された。

この試掘調査の結果を基に、今後の対応について同年12月22日付けで、茨城県教育委員会文化課に、文化財保護法第92条第1項に基づく現状保存等についての指導助言を受け、事業計画の変更や遺跡の現状保存が不可能であり遺構保護層の確保が難しいことから、発掘調査を実施し記録保存することとなつた。

平成22年1月27日、教育委員会はエヌ・ティ・ティ・ドコモと有限会社日研アーツとの間で発掘調査実施に関する三者協定書を締結し、同年3月1日から3月31日までの期間で現地調査作業と報告書刊行等の内容で発掘調査を実施するに至つた。

（稲敷市教育委員会）

### 第2節 調査経過

沼田貝塚の本調査は、平成22年3月1日から同年3月20日まで実施した。先に実施した試掘調査の結果に基づき、対象開発区域144m<sup>2</sup>全面調査となつた。

まず平成21年10月28日に行われた事前の試掘調査の結果によると、開発計画地に幅2m、長さ約10mの試掘トレシ4本設定し、竪穴建物、土坑、溝と推定される遺構と貝層の存在が報告された。これに基づき今回の調査において丁寧な精査を繰り返した結果、試掘調査と同様、黒色土の落ち込みは竪穴建物、土坑、溝、柱穴であることが判明した。これらは調査対象区ほぼ全面隙なく分布していた。竪穴建物は試掘調査と同じ地点に3軒検出され、いずれも未調査区域に伸びていつくもの縄文時代中期に比定され、西端で確認されたS102および03と命名した竪穴建物は重複しており、うち1軒は市内において初見となる有段竪穴建物である。また土坑は2基検出された。やはり縄文時代中期に属し、南西端の土坑SK02は半分が未調査区域に伸びているものの、いわゆる袋状を呈していた。また溝は3条確認され、うち2条は試掘調査においてすでに確認されていたもので、東端の溝SD01は、もともと明治時代の遺跡名である「上岐貝塚」に関連する中世の区画溝である。そのほか柱穴が4基検出された。出土遺物がなく時期を確定できないが、覆土の状況から判断して中世の柱穴の可能性が高い。そのほか有段竪穴建物S103の覆土上層の輒乱層で貝層の一部が確認された。小型のハマグリを主体とする純貝層であった。

また、遺物の出土は、遺構の性格からみても全体的に少ないが、有段竪穴建物から、ほぼ完形に近い縄文時代中期後半・加曾利E1式の深鉢土器が覆土中から検出されている。そのほかの遺構からは遺物の出土は限られていた。

最後に遺構の希薄である調査区北東隅平坦部に旧石器文化層を確認するため2m×2mのグリッド(PG01)を設定し深掘調査を実施する。表土層の耕作土下部は黄褐色軟質ローム層となり、周辺地域とほぼ同様な基本層序を示している。また、Ⅲ層は第2黒色帯に相当するにぶい黄褐色ローム層で常緑台地における重要な鍵層である。しかし、これら明確な基本層序をもしながら、あいにく旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの観察となつた。（第4図）

なお、発掘調査の開始に際しては、対象となる区域を総括するように世界測地系に基づく座標を基準とした発掘区の設定を行つた。X=4,690、Y=42,600の調査区内北側を起点とし、基本的に一辺10mのグリッドを設定した。しかし、調査範囲が南北12.5m、東西12.0mと限られており、そのなかに改めて小グリッドのような調査区の設定は行っていない。（第3図）

発掘調査は平成22年3月20日確認された全ての遺構を調査し終了した。もっとも注目されるのが有段窓穴建物S-I 03である。今回の調査で、一部未調査部分が残ってしまったとはいえ、有段窓穴建物の存在が確認できたことは大きい。しかも唯一完形に近い深鉢である加曾利E 1式土器の出土によって、有段窓穴建物が伝播経路として利根川沿いの茨城県側から千葉県側への南下が明らかになることを期待し、さらに建物の性格を知るうえで重要な調査であったといえよう。

(小川和博)

### 第3節 調査日誌

- 2月22～25日 調査準備(調査機材の確認・重機の手配等)、地主および周辺住民への挨拶。
- 2月26日 調査範囲の確認(現地確認)。
- 3月1日 重機による表土層除去を開始。遺構検出精査作業を実施。溝SD01の検出作業。
- 3月2日 座標測量、溝SD01、上坑SK01・02、柱穴P-01、窓穴建物S-I 01～03検出作業。  
セクション図実測作業、写真撮影。
- 3月3日 窓穴建物S-I 03が有段窓穴建物であることが判明する。柱穴P-02、溝SD02検出作業。  
窓穴建物S-I 01・02のセクション図実測作業。窓穴建物S-I 01写真撮影。
- 3月4日 有段窓穴建物S-I 03の精査。窓穴建物01・02貼床除去作業。旧石器時代試掘調査。  
窓穴建物S-I 01・02、溝SD02・03、柱穴P-03・04平面図実測作業。
- 3月5日 調査区全体測量を実施。
- 3月6日 現地周辺区域の踏査。
- 3月10日 発掘調査終了確認依頼。埋蔵物発見届の提出。
- 3月18日 発掘現場清掃作業。
- 3月19日 茨城県教育委員会による現地終了確認を実施。
- 3月20日 現場の一部(危険箇所)の埋戻し作業を行い、発掘現場作業を完了する。
- 4月23日 茨城県教育委員会より発掘調査の終了したことが確認される。

(遠藤啓子・大淵淳志・小川和博)

### 第4節 遺跡の位置と周辺の遺跡

#### 第1項 遺跡の位置 (第1・2図)

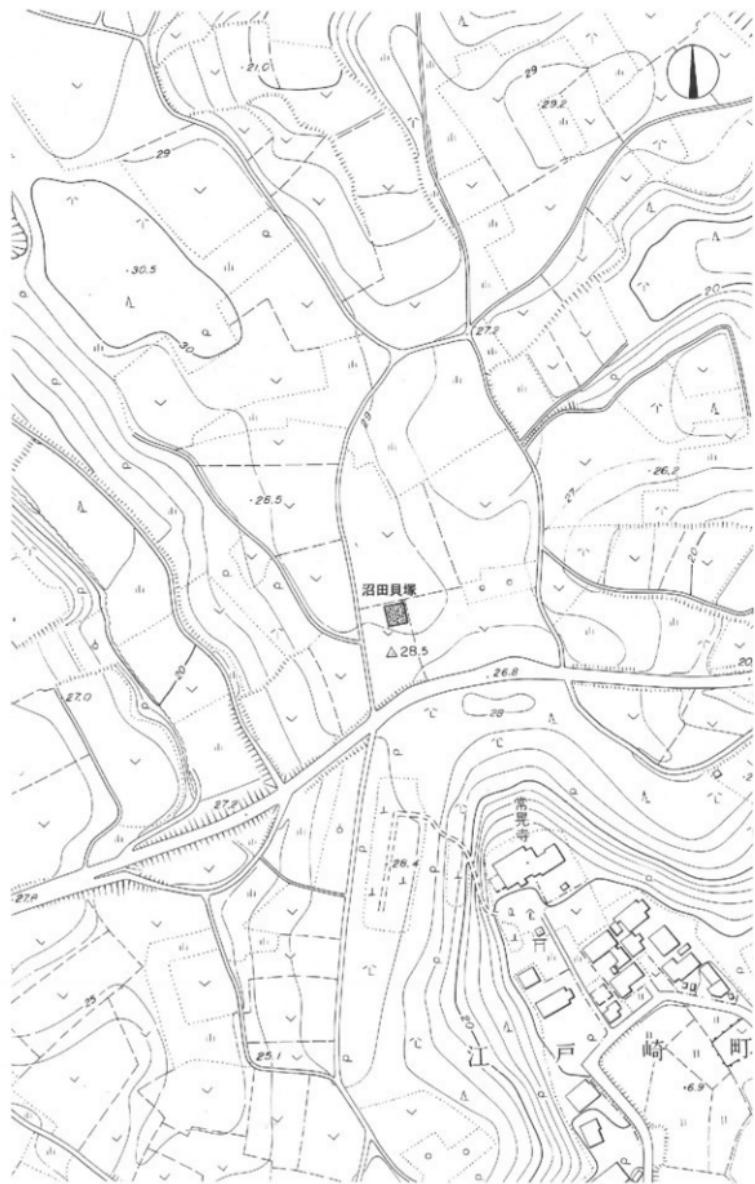
沼田貝塚は、稲敷市の北西側で、沼田字神田2077番6に所在し、稲敷市江戸崎町庁舎の西1.6kmの市郊外、北緯35° 57' 13" E、東経140° 17' 33" に位置し、標高28.5mの三角点が隣接して設置されている。また西側500m先には首都圏中央連絡自動車道稲敷インターチェンジ料金所が、さらに現在整備中である江戸崎新利根バイパスが北側に開通する。

ここは常締台地北東部に相当し、通称稲敷台地縁辺部に形成された洪積台地上にあたる。付近は南側が龍ヶ崎市との境で1級河川小野川の一主流である沼里川の左岸にあたり、北側にはこの沼里川の支流である小河川に挟まれた外見上釣り針状に弯曲した舌状台地が侵食され複雑な地形を呈している。さらに詳細にみると立地する遺跡の周辺は沼里低地から北側へ支谷が小さく入り込み渦状を呈し、反対側は北側を流れる沼里川の一主流からの谷が入り込み、谷頭が南北両側から挟み、台地は西側へ向かって緩傾している。遺跡はこの両谷頭を見下ろす標高28.40mのほぼ平坦部に立地し、かつては周間に貝屑が広く散布していたものの、現在は畑地の開墾等により露呈する貝層を確認することはできない。なお、南側の谷津田との比高差は約21mを測る。

(小川 和博)

#### 第2項 周辺の遺跡 (第2図)

平成の市町村大合併によって江戸崎町は桜川村・東町・新利根町が合併し稲敷市となり、これによって遺跡数は増えたとはいえ、総体的にみてまだ十分遺跡が掌握されているわけではない。かつて旧江戸崎町で周知されている遺跡



第1図 沼田貝塚周辺地形図 (1:2500)

は166ヶ所あり、10年前まで52ヶ所といわれていたものが3倍以上追加されたことになる。また現在整備中である首都圏中央連絡自動車道は現在橋敷インターチェンジが開通し、さらにそれらに連絡するアクセス道路江戸崎新利根バイパスが一部開通するなど、今後確実に人口が増え、さらに大規模な開発が予想されるなど県内でも注目される地域のひとつでもある。それに伴い新たな遺跡が確認される可能性が高いといえよう。

さて、沼田貝塚が立地する区域は、北東に霞ヶ浦、南に沼里川や小野川が流れ、小規模な支台が霞ヶ浦に向かって東西に細長く延びた洪積台地である。ここは幅狭く複雑に開析された舌状台地がいくつも形成され、台地上には绳文時代から近世に至るまでの多くの遺跡が確認されており、とくに绳文時代と古墳時代の遺跡が集中しているのが特徴である。ここで沼田貝塚周辺の遺跡について概観してみたい。

まず旧石器時代は市内全体をみても少なく、周辺では確認することはできないものの、立地する台地が異なるが平成4年にゴルフ場造成に先行して調査された「秋平遺跡(056)」でナイフ形石器が確認されている。

次の绳文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では明治時代より知られている「吹上貝塚(005)」「村田貝塚(006)」「台畠貝塚(035)」をはじめ「明神貝塚(004)」「神田道貝塚(014)」「荒山遺跡(045)」「新山遺跡(072)」「大門遺跡(075)」「荒野遺跡(076)」「芝ヶ谷遺跡(077)」「花指遺跡(078)」「赤羽根遺跡(087)」「立通し遺跡(088)」「中道遺跡(097)」「狸崎遺跡(105)」「原南遺跡(107)」「児松遺跡(108)」「堂ノ上遺跡(109)」「塙遺跡(110)」「羽賀栗山遺跡(111)」が周知されており、沼田貝塚に隣接する「大夫屋敷遺跡(016)」では平成21年の調査で中期後半の拠点的集落が明らかにされている。また平成17年に発掘調査した「根崎遺跡(162)」では早期・井草式期から前期終末までの遺物が出土し、同時に調査した「下ノ内遺跡(164)」では前期・黒浜式期の陥穴1基が検出されている。なお、稲敷市内全体をみても明治時代より知られた著名な遺跡が多く、とくに貝塚については歴史的にみても特筆されるものがある。なかでも椎塚字中峯に所在する後期の「椎塚貝塚」は明治初期・日本考古学の幕開けとなった東京都の大森貝塚の調査から15年後、明治26年に発掘調査され、ヤスが突き刺さったまま出土した頭頸骨は绳文時代の漁獵史において全くことのできない一般資料である。そのほか国指定の土塼をはじめ埴形土器、土偶、土版、石棒などはいずれも考古学史上重要な位置付けがされている。一方隣接する対岸の台地上には昭和43年に早稲田大学が調査した「村田貝塚(06)」が位置する。当貝塚は大きく4地点の斜面部に形成された地点貝塚で、南東側のⅠ・Ⅱ地点が中期、西側のⅢ・Ⅳ地点が前期後半という集落移動の明確な貝塚であり、中期については沼田貝塚との関連性が指摘される。

弥生時代は極端に少なく、周辺では「立通し遺跡(088)」「塙貝塚(096)」が周知されているのみである。なお旧町内では12ヶ所が知られており、調査された集落跡では「橋の台古墳群(022)」「大日山古墳群(051)」「思川遺跡(053)」「秋平遺跡(056)」「根崎遺跡(162)」のほか、「下ノ内遺跡(164)」で弥生時代中期末葉の住居跡が検出されている。

古墳時代になると古墳をはじめ、集落跡も數多く報告されている。周辺では第1図に示した分布図内で半分以上の36ヶ所が所在する。また古墳では平成3年に調査した「土戸古墳(046)」や平成20年に調査した「中城古墳群(040)」のほか、「見晴塚古墳(002)」「亀ヶ谷城古墳(007)」「木納場古墳(009)」「大塚古墳(010)・溝滅」「浅間山古墳群(013)」「涙城」「大日古墳(038)」「東前古墳群(047)」「外浦古墳(070)」「亀台古墳群(099)」が所在する。

次の奈良・平安時代の遺跡としては先の江戸崎バイパスに伴い調査された「大夫屋敷遺跡(016)」において集落跡が確認され、そのほか「土戸古墳(046)」でも住居跡が検出されている。なお、隣接する下君山の台地南端に位置する「下君山廃寺(012)」では、とくに常陸國分寺系の素縫複弁十葉軒丸瓦や均整唐草文平瓦等をはじめとする布目瓦が多量に出土し、塔の心礎と想定される平石の存在が明らかにされている。しかも8世紀代の金銅仏の出土も報告されており、「信太郡」の都衙の推定地として明治時代より指摘されている。また昭和63年に県道新川江戸崎線の道路改良工事に伴い調査された「二の宮貝塚(032)」および「思川遺跡(053)」では集落内から土師器・須恵器のほか、灰釉陶器の平瓶、把手付瓶、綠釉陶器の輪花、さらに唐鏡(瑞花双鳳鏡)の破片の出土が報告されている。

中世になると沼里川や小野川流域の台地上には城跡や砦跡が築かれる。「江戸崎城跡(001)」をはじめ、平成20年に調査した「中城古墳群(040)」に連携する「羽賀城跡(039)」。中峯遺跡(037)として周知されている「中峰城跡」がある。これらを総合的にみるとこの地が霞ヶ浦の肥沃な土地を背景に、政治的にも中心的な機能をもたらしていたことは疑いない。

(小川 和博)



- 031 沢田貝塚 001 江戸堀城跡 002 犬嗜塚古墳 003 豆葉師遺跡 004 明神瓦窯 005 吹上貝塚 006 村田貝塚 007 亀ヶ谷城古墳  
 008 荒地古墳 009 木の湯古墳群 010 大塚古墳 013 浅間山古墳群 014 神田貝塚 015 自樂前遺跡 016 大夫屋敷遺跡 035 台烟原跡  
 037 中霧古跡 038 大日古墳 040 中城古墳 045 新山遺跡 046 戸戸古墳 047 東前古墳群 065 佐倉原遺跡 069 佐倉原南遺跡  
 070 外浦古墳 071 新山古遺跡 072 新山遺跡 073 大塚遺跡 075 大門遺跡 076 萩野遺跡 077 亀ヶ谷遺跡 078 花指遺跡  
 087 赤羽根遺跡 088 立酒古跡 089 一童塚古跡 090 赤羽根塚 091 原久保遺跡 092 岸崎平遺跡 093 宮後遺跡 094 鴻田庚申塚  
 095 神明平遺跡 096 本木遺跡 097 中道遺跡 098 沢田遺跡 099 亀台古墳群 100 桂作台遺跡 101 辺田後遺跡 103 古橋塚  
 104 押純北遺跡 105 関野遺跡 106 愛大日遺跡 107 原南遺跡 108 元松遺跡 109 妙上遺跡 110 墓遺跡 111 羽賀榮山遺跡  
 112 山後古墳 113 山後遺跡 114 高野遺跡 116 観音前遺跡

第2図 道路の位置と周辺の遺跡 (1 : 25000)

## 参考文献

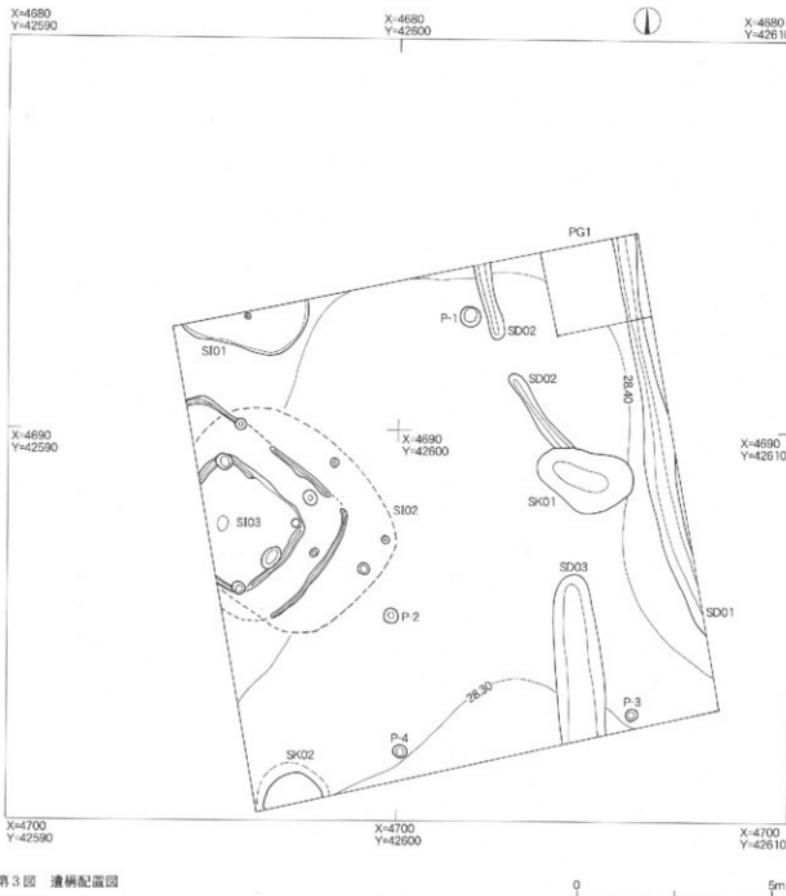
- 八木茂三郎他 1893 「常陸國椎塚介墟發掘報告」『東京人類學雜誌』第八卷第八・十七卷
- 酒詰仲男 1959 「日本貝塚地名表」土曜会
- 茨城県史編さん原始古代史部会 1974 『茨城県史 考古資料編・古墳時代』茨城県
- 西村正衛 1981 「茨城県江戸崎町村田貝塚(第一次調査)」早稲田大学教育学部『學術研究第30号』
- 斎藤弘道 1981 「茨城県の縄文時代貝塚(1)」茨城県歴史館報8
- 斎藤弘道 1982 「茨城県の縄文時代貝塚(2)」茨城県歴史館報9
- 西村正衛 1989 「18. 茨城県江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として』早稲田大学出版部
- 鈴木美治 1991 「二の宮貝塚・大日山古墳・思川遺跡—一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財團文化財報告第65集
- 江戸崎町史編纂委員会 1994 『江戸崎町史』江戸崎町
- 茨城県立歴史館 1994 「學術調査報告書、4. 茨城における古代瓦の研究」
- 茨城県 1995 『茨城県史 考古資料編・奈良平安時代』
- 大賀健他 1999 「秋平遺跡・池平遺跡・中佐貝塚」江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会
- 小川和博 2006 「根崎遺跡発掘調査報告書」稻敷市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 小川和博 2006 「下ノ内遺跡発掘調査報告書」稻敷市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 小川和博 2008 「青宿遺跡発掘調査報告書」稻敷市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 野村浩史他 2009 「中城古墳群」稻敷市埋蔵文化財調査報告書第5集

(小川和博)

表1 沼田貝塚と周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
0 3 1	沼田貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	2010発掘調査
0 0 1	江戸崎城跡	城館跡	中世、近世	
0 0 2	見晴理古墳	包蔵地、古墳	古墳	
0 0 3	豆葉跡遺跡	包蔵地、古墳	縄文、古墳、中世	
0 0 4	明神貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	
0 0 5	吹上貝塚	貝塚	縄文、弥生、古墳	
0 0 6	村田貝塚	貝塚	縄文、古墳、中世	1968早稲田大学発掘調査
0 0 7	龜ヶ谷古城	古墳	古墳	
0 0 8	荒地古墳	古墳	古墳	
0 0 9	木納堀古墳群	古墳群	古墳	
0 1 0	大塚古墳	古墳	古墳	湮滅
0 1 3	洗間山古墳群	古墳群	古墳	湮滅
0 1 4	神田遺貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	
0 1 5	自穀前遺跡	包蔵地、古墳群	古墳、奈良・平安、中世	
0 1 6	大夫屋敷遺跡	包蔵地、古墳	古墳、奈良・平安	2010発掘調査
0 3 5	台畠貝塚	貝塚	縄文、古墳	
0 3 7	中峰遺跡	包蔵、古墳、城跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世	2007発掘調査
0 3 8	大日古墳	古墳	古墳、中世	
0 4 0	中城古墳群	古墳	古墳、中世	2008発掘調査
0 4 5	栗山遺跡	包蔵地、古墳群	縄文、古墳	
0 4 6	土戸古墳	古墳、集落	縄文、古墳、奈良・平安	1991発掘調査 湪滅

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
047	東前古墳群	古墳群	古墳	2007発掘調査
065	佐倉原遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
069	佐倉原南遺跡	包蔵地生産遺跡	古墳	
070	外浦古墳	古墳	古墳	
071	新山西遺跡	包蔵地、古墳	古墳、奈良・平安、中世	
072	新山遺跡	包蔵地	縄文	
073	犬塚遺跡	土器、塚	中世、近世	
075	大門遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
076	荒野遺跡	包蔵地	古墳	
077	芝ヶ谷遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
078	花指遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
087	赤羽根遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
088	立通し遺跡	包蔵地	縄文、弥生	
089	二垂堤遺跡	防壁	中世	
090	赤羽根塚	塚	近世	
091	原久保遺跡	包蔵地	古墳	
092	時崎平遺跡	包蔵地、貝塚	古墳	
093	宮後遺跡	包蔵地	古墳	
094	沼田庚申塚	塚	近世	
095	神明平遺跡	包蔵地	古墳	
096	塚本遺跡	包蔵地、古墳群	弥生、古墳、奈良・平安	2007発掘調査
097	中道遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安、中世	
098	沼田遺跡	城館跡	中世	
099	龜台古墳群	古墳群	古墳	
100	柿作台遺跡	包蔵地、貝塚	古墳、奈良・平安	
101	辺田後遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
103	古橋塚	塚	近世	
104	理崎北遺跡	包蔵地	古墳	
105	理崎遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	
106	原大日遺跡	塚	近世	
107	原南遺跡	包蔵地、貝塚	縄文	
108	児松遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	2009発掘調査
109	堂ノ上遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	2007発掘調査
110	塙遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、中世	
111	羽賀栗山遺跡	包蔵地	縄文	
112	山後古墳	古墳	古墳	
113	山後遺跡	防壁	中世	
114	高野遺跡	墓地	中世	
116	観音前遺跡	包蔵地	奈良・平安、中世	



第3図 道構配図

## 第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

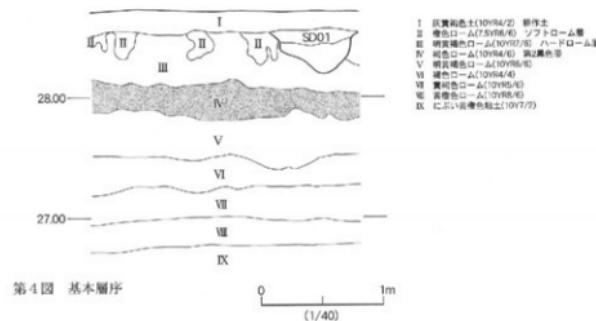
### 第1節 概要 (第3図)

沼田貝塚は、現福敷市の西部、沼里川左岸の標高28.5mの谷頭部上に所在する。ここは北側に支谷が小さく入り込んだ台地の縁辺で、しかも反対の北側の東西に流れる沼里川の支流の谷が入り込み、谷頭が南北両側から挟まれた緩傾斜部に遺跡が展開している。今回の調査は確認調査の結果に基づき、開発対象区域の全面144m<sup>2</sup>が対象となっており、ここから縄文時代の竪穴建物2軒、有段竪穴建物1軒、土坑2基、柱穴4基のほか、中世の溝1条、時期不明の溝2条が検出された。竪穴建物2軒は未調査区域に延びており、完掘できないものの、縄文時代中期中葉から後半に比定される。また有段竪穴建物も一部未調査区域に延び、その全容を把握できていないが、長方形を呈し、下段の四隅に柱穴を伴う典型的な有段竪穴建物である。土坑は2基検出され、うち1基は椭円形ながら覆土の状況などから縄文時代に比定されよう。もう1基は縄文時代中期のいわゆる袋状を呈している。また溝は3条検出されており、うち調査区東端の南北に走る溝SD01と柱穴4基は中世に比定される。

### 第2節 基本層序 (第4図)

今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄である調査区北東溝に2×2mのグリッド(PG 1)を設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかつたものの、市内の資料蓄積としてローム層の調査を行い、今後の調査の資料に供したい。設定した地点はほぼ台地平坦部で、IV層褐色ローム層である第2黒色帯が難層となっている。

- I 層 灰黄褐色層(10YR4/4) 耕作土層。縮りがなく、粘性に欠ける。
- II 層 橙色土ローム層(7.5YR6/6) ソフトロームである。軟弱である。大半が耕作時において削平され、縮りにやや欠け、粘性は普通である。
- III 層 明黄褐色ローム層(10YR7/6) やや明るいハードローム層。堅致で縮りがある。層厚は40cm前後を最大層厚とする。AT層に相当するものと考えられる。
- IV 層 褐色ローム層(10YR4/6) 第2黒色帯に相当するものと思われる。縮りがある。層厚は20~35cmを測る。赤色粒子・炭化粒子を少量含む。
- V 層 明黃褐色ローム層(10YR6/6) 上層よりも明るいが全体的に暗いハードローム層。縮りがある。層厚は25~35cm前後としっかりした層位を示す。赤色粒子を微量含む。
- VI 層 褐色ローム層(10YR4/4) 明るいハードローム層。堅致で縮りがある。層厚は15~30cm前後と安定している。白色粒子を少量含む。



VII層 黄褐色ローム層(10YR5/6) 繰りがあり、粘性が強い。層厚は25~30cm前後としっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。

VIII層 黄褐色ローム層(10YR8/6) 繰りがあり、粘性が強い。層厚は20cm前後としっかりした層位を示す。炭化粒子を少量含む。立川ローム最下層に相当するものと思われる。

IX層 にぶい黄褐色粘土層(10Y7/2) 繰りがあり、粘性にとむ。

(小川和博)

### 第3節 検出された遺構と遺物

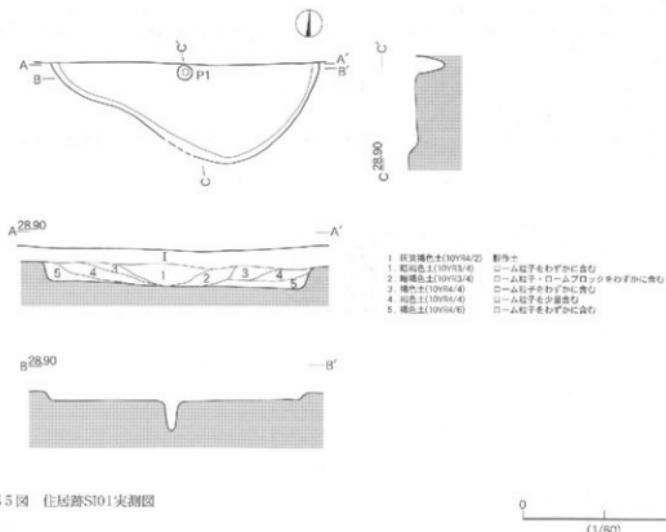
#### 第1項 壁穴建物(第5~7図)

##### 1 壁穴建物S I 01(第5図)

調査区北西隅に位置する。立地する標高は28.38m。北側約半分が未調査区域に延びている。検出された東西辺はほぼ直線的で2.60m。南北辺は緩いカーブを描き1.5mと東西にやや長い楕円形を呈するものと推定される。東西軸を通る主軸方位はN-69°-Wを指す。壁高は23.0cmを測り、緩く外傾して立ち上がり、比較的良好な掘り込みである。床面は平坦で、僅かに貼床部が検出できた。壁溝は構築されていない。柱穴は中央近くに1本検出された。大きさは径27.0×30.0cm、深さは39.1cmを測る。か跡は確認できなかった。壁穴覆土は5層に分層可能で上層が暗褐色土、周辺から床面までが褐色土で覆われており、レンズ状の堆積状態を示す自然堆積層である。なお、本跡から遺物の出土しないが、覆土の状況から判断して縄文時代中期に比定される。

##### 2 壁穴建物S I 02(第6・7図)

調査区北西側に位置する。立地する標高は28.345m。大半がS I 03によって切られ、東側壁面は耕作により削



第5図 住居跡S I 01実測図

平され、さらに西側の一部が未調査区域に延びており、明確な形状を把握できないが、炉跡と一部残存している床面および柱穴の配置により不確実ながら計測は可能である。確認できる東西軸4.75m、南北軸5.80mと南北に長い楕円形を呈するものと推定される。南北軸を通る主軸方位はN-50°-Wを指す。壁高は耕作によって削平され、西側の断面においても明瞭な立ち上がりが確認できなかった。床面は直床でほぼ平坦である。壁溝は構築されていない。炉は検出土面の中央東側に位置し、有段窓穴建物S I 03の上床面下で検出された。大きさは径35.0cm×42.0cm、深さ2.2cmの楕円形を呈し、掘形は浅い掘鉢状で、炉底面は火熱により堅緻で赤化し、覆土に赤褐色の焼土粒が堆積していた。柱穴は壁際に主柱穴となるP I ~ P 4の4本と建物内側中央にP 5の1本の合計5本が検出された。大きさは下記のとおりで、いずれも円形を呈し、径28cm前後を測るもの、深さについては16.4~62.3cmとばらつきがみられる。建物覆土は耕作による削平のため明瞭ではないが、床面上は暗褐色土で覆われていたようである。出土遺物から中期・阿玉台後半期に比定される。

#### 柱穴計測値（単位cm）

	短径×長径	深さ									
P1	26×30	16.4	P2	29×31	27.8	P3	28×30	24.2	P4	27×28	26.7
P5	17×24	62.3									

薄層の覆土中より出土した土器は中期の上層3点を図示できた。第7図1は深鉢形土器の胴部破片。降帯区画文に沿って二列の角押印を施す。胎土に石英、長石粒を含む。阿玉台II式。2は平縁の深鉢形土器。口縁部上位に単筋Rしの繩文帯を区画文する。区画内に爪形文を沿い一本描き沈線文を充填する。胎土に石英、長石、黒色粒子を含む。阿玉台III式。3は平縁の深鉢形土器。口縁部破片である。口縁部に単筋Rし繩文を施した縦帶による楕円形区画文を構成する。区画内には、一本描き沈線文が沿う。さらに沈線区画内に波状文を充填している。胎土に石英、長石、黒色粒子を含む。阿玉台IV式。

#### 第2項 有段窓穴建物（第8・9図）

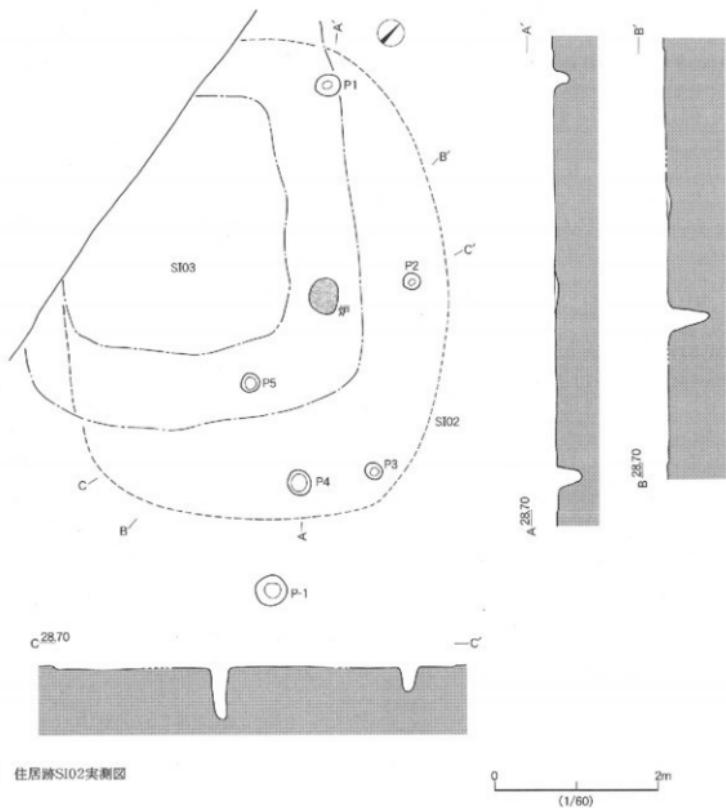
##### 1 有段窓穴建物S I 03（第8・9図）

調査区北西側に位置する。立地する標高は28.37m。窓穴建物S I 02を切り、西側約1/3が未調査区域に延びている。上床部と下床部を伴う有段窓穴建物で、確認された上床部の南北軸5.5m、東西軸4.15m。下床部は南北3.17軸m、東西軸2.75mを測り、南北に長い長方形を呈する。南北軸を通る主軸方位はN-48°-Wを指す。壁高は確認面と上床部の比高差ではなく、上床部と下床部は13.5~23.5cmを測り、比較的良好な掘り込みで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。上床部の幅は南側が77cm、東側が68cm、北側が正確に計測できないが150cm前後である。上・下床部ともに平坦で、僅かに貼床部が検出できた。壁溝は上床部と下床部で検出されており、上床部では全周していたものが、耕作により部分的に削平されたものと推定でき、幅6.0~21.5cm、深さ5.5~8.7cmを測る。また下床部は検出部において東壁を除き掘削されている。幅9.0~21.0cm、深さ5.0~10.5cmである。柱穴は下床に4本検出された。うち3本は下床部の隅に設置された隅柱である。大きさは下記のとおりで、隅柱3本は径24~41cm、深さは38.1~76.9cmとしっかり掘削している。また南壁際中央に楕円形を呈した土坑状の柱穴が穿ってあり、入り口部施設と推定される。因みに径38.0×61.0cm、深さ6.1cmで、底面は平坦がなく鍋底状である。また掘り込みの明瞭な炉跡は確認できないが、径2.6×3.5cmの楕円形状の焼上跡が下床部北側で確認された。建物覆土は4層に分層可能で、ほぼ全層褐色土で覆われ、床面および壁際には暗褐色土が堆積するレンズ状を示す自然堆積層である。出土遺物より判断して中期後半・加曾利E 1式期に比定される。

##### 柱穴計測値（単位cm）

	短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ
P1	40×41	76.8	P2	24×25	60.2	P3	30×31	38.1	P4	38×61	6.1

第9図1は入り口部施設であるP 4の上面覆土中より出土した土器。中期後葉・加曾利E 1式期の土器で、深鉢形土器のほぼ完形品である。器形は括れのない底部から直線的に外傾する筒形を呈する。最大径を口縁部にもち、口径20.5cm、器高27.4cm、底径19.0cmを測る。口縁部は折り返し口縁で、折り返し部は幅2.5~3.0cmの無文帶



第6図 住居跡SI02実測図

0 2m  
(1/60)



第7図 住居跡SI02出土遺物

0 10cm  
(1/3)

である。胴部は単節RL縄文を縦位回転させる。また内面口縁部下位は肥厚し、有段となる。胎土に石英・長石粒を含む。2は深鉢形土器の胴部破片。単節RL縄文を施す。胎土に石英・長石粒を含む。加曾利E1式土器。

### 第3項 土坑（第10～13図）

#### 1 土坑SK01（第10・11図）

調査区東側、標高28.11～28.35mに位置し、SD01・02に切られている。規模は上場長軸2.58m、短軸1.55m。底面長軸1.65m、短軸0.77mで、主軸方位はN-84-Wの南北に長い楕円形を呈し、深さ54.9cmを測る。底面は平坦部が少なく、起伏をもち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土と黄褐色土の互層で8層からなる人為的埋戻し土層である。遺物は、小破片の縄文土器で阿玉台Ib・II式、加曾利E1・2式期の土器が出土しており、本跡の時期は中期後半・加曾利E2式期と推定される。

第11図1は深鉢形土器の口縁部破片。口唇部に爪形文を廻らす。体部は無文である。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台Ib式。2は深鉢形土器の胴部破片。隆帯に沿って二列の角押文を施す。施文具は先を二叉にした工具を用いる。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台II式。3は深鉢形土器の口縁部破片。縄文施文に平行沈線に挟まれた隆帯を区画文とする。御文原体は単節RLである。胎土に石英・長石粒を含む。加曾利E1式。4は縄文施文の深鉢形土器の胴部破片。単節RLを施す。胎土に黒色粒子・石英・長石粒を含む。加曾利E1式。5・6は同一個体と推定されるキャリバー形の深鉢形土器。口縁部文様帶は隆帯に沿って沈線文による渦巻文と楕円形区画文を描出す。胴部文様帶は口縁部文様帶直下から二本一組の懸垂文を垂下させ、沈線間を磨消す。地文は単節RL縄文。胎土に黑色粒子・石英・長石粒を含む。加曾利E2式。

#### 2 土坑SK02（第12・13図）

調査区南西側、標高28.26mに位置し、南側半分は未調査区域に延びている。規模は円形を呈するものと推定され、検出部の上場長1.48m、底面長1.68m、深さ34.0cmを測り、また底面は平坦で、壁は内傾して立ち上がる。本跡は底面が上場より15.0cmほど広がるいわゆる袋状土坑である。覆土は上層が黒褐色土を主とし、下層は褐色土を主とする6層からなる自然堆積層である。遺物は、覆土中より阿玉台式期初期段階の土器が出土しており、本跡の時期は中期中葉・阿玉台式期と推定される。

第13図1は深鉢の胴部破片、一列の角押文による意匠文で、「Y」字状の連携文であろうか。胎土に石英・長石粒を含む。阿玉台Ib式期。2は深鉢の底部破片。径10.8cmを測る。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。

### 第4項 溝（第14～16図）

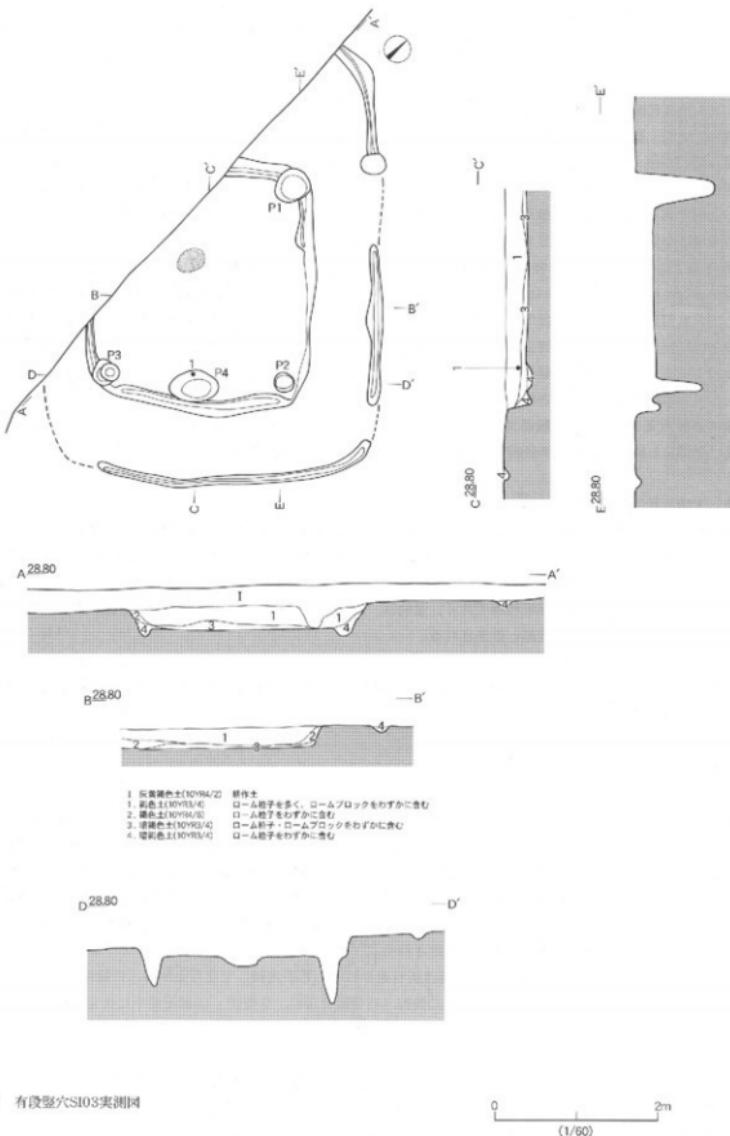
#### 1 溝SD01（第14・15図）

調査区東端、標高28.20mに位置する。南北に走る溝で、北および南側は未調査区域に延びており、検出は部分的である。屈曲部はなくほぼ直行している。また底面は平坦部がなく、横断面がU字状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。確認できる長さ10.32m、溝上幅28.0～47.5cm、法高12.25～15.0cm、底幅10.0～29.0cmを測る。走行する方位はN-12°-Wを指し、わずかに北側が高く、南側が低くなってしまい、その比高差は13cm前後である。覆土は2層確認でき、自然堆積であろう。なお、水が流れた痕跡は確認できなかった。遺物として中世・常滑の甕口縁部破片が出土しており、本跡は中世に比定される。

第15図1は常滑・甕の口縁部破片。口縁部は折り返し口縁。若干内傾して立ち上がる。口縁部の幅がやや広く、頸部に密着している。焼き締めは普通。胎土に長石・石英粒を含む。9型式・15世紀前半に比定される。

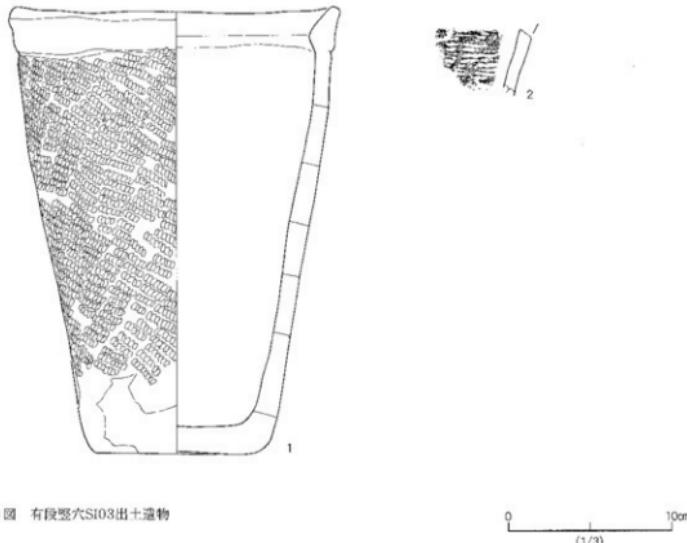
#### 2 溝SD02（第16図）

調査区北東側、標高28.50mに位置する。南北に走る溝で、北側が未調査区域に延びており、検出は部分的である。走行は弧状気味に湾曲しており、底面は平坦部がなく、横断面がU字状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。また途中間欠している。確認できる長さ5.1m、溝上幅31.0～50.0cm、法高10.0～17.1cm、底幅10.0cmを測る。



第8図 有段型穴SH03実測図

0 2m  
(1/60)



第9図 有段堅穴SI03出土遺物

0 10cm  
(1/3)

走行する方位はN-24°-Wを指し、わずかに北側が高く、南側が低く、その比高差は8cm前後である。なお、水が流れた痕跡は確認できなかった。しかも遺物の出土もなく、構築時期も不明であるが、覆土の状況から判断して近世以降となろう。

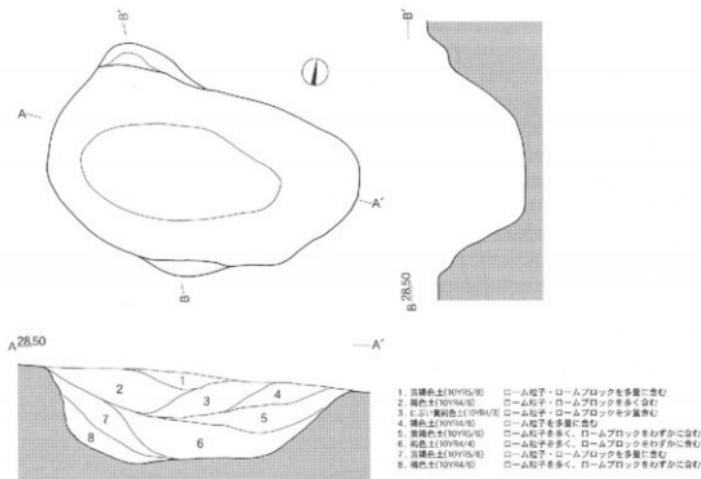
### 3 溝SD03（第16図）

調査区南東側、標高28.32mに位置する。東西に走る溝で、南側が未調査区域に延びており、検出は部分的である。直線に走行している。また底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。検出した長さ4.25m、溝上幅1.18m、法高12.5cm、底幅89.0cmを測る。走行する方位はN-03°-Wを指し、南北端の比高差ほとんどない。なお、本跡北側で結尾するものと推定される。覆土は2層確認でき、自然堆積であろう。また、水が流れた痕跡は確認できなかった。構築時期は遺物の出土はないものの、覆土の状況から溝SD01に酷似していることから中世に比定される。

### 第5項 柱穴（第6・17図）

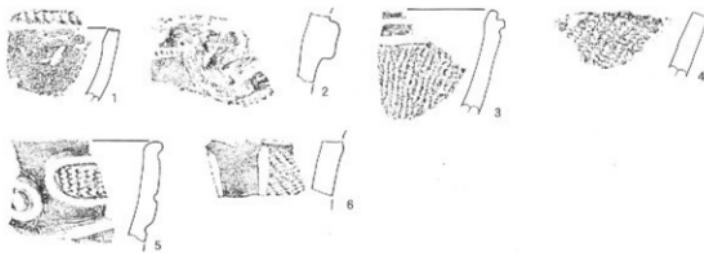
#### 1 柱穴P-1（第6・17図）

調査区北東側、標高28.36mに位置している。規模は上場長軸62.4cm、短軸60.0cmの円形で、深さ60.0cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦あたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。



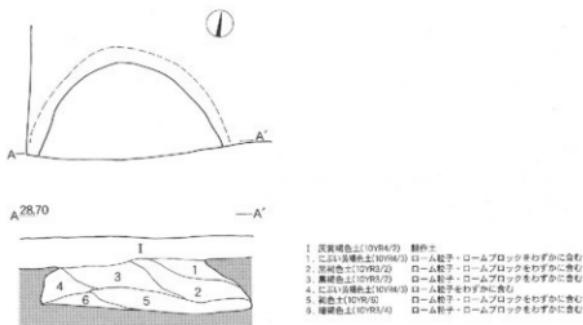
第10図 土坑SK01実測図

0 1 1m  
(1/40)



第11図 土坑SK01出土遺物

0 1 10cm  
(1/3)



第12図 土坑SK02実測図

0 1m  
(1/40)



第13図 土坑SK02出土遺物

0 10cm  
(1/8)

### 2 柱穴P-2 (第17図)

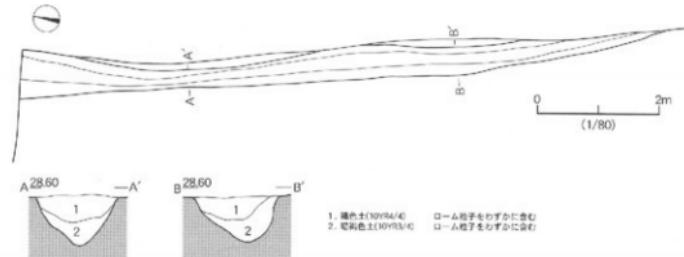
調査区中央南西側、標高28.30mに位置している。規模は上場長軸38.0cm、短軸37.0cmの円形で、深さ14.0cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

### 3 柱穴P-3 (第17図)

調査区南側、標高28.0mに位置している。規模は上場長軸33.0cm、短軸32.0cmの円形で、深さ42.5cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

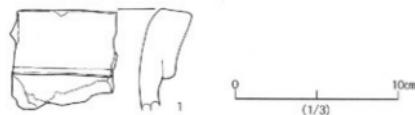
### 4 柱穴P-4 (第17図)

調査区側、標高28.05mに位置している。規模は上場長軸41.0cm、短軸35.0mの楕円形で、深さ78.5cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

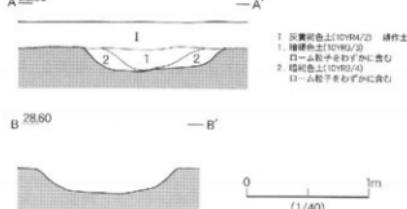
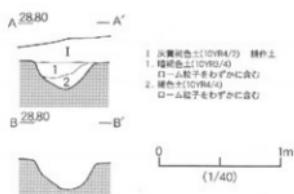
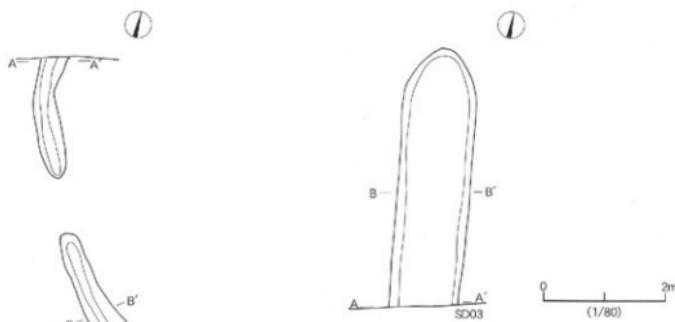


第14図 清SD01実測図

0  
1m  
(1/40)

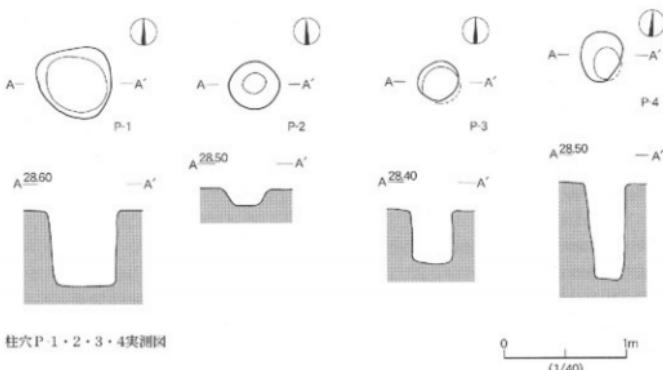


第15図 清SD01出土遺物



第16図 清SD02・03実測図

1 反対褐色土(10YR4/2) 稼作土  
2 黄褐色土(10YR3/4)  
3 緑褐色土(10YR4/4)  
ローム粒子をわずかに含む



第17図 柱穴P-1・2・3・4実測図

0  
(1/40)  
1m

## 第6項 遺構外出土遺物（第18図）

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文土器、磨石、貝類である。貝類は有段竪穴建物S I 03の上面擾乱層から比較的まとまって出土した。

## 1 縄文土器（第18図）

縄文土器は6点を図示した。1は深鉢形土器の胴部破片。アナグラ属の貝殻腹縁による刻目が施されている。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。中期・阿玉台Ib式。2は深鉢形土器の胴部破片。沈線で挟まれた階層区画文に単節RL縄文を施す。胎土に石英・長石粒を含む。中期・加曾利E 1式。3は深鉢形土器の胴部破片。沈線区画文に単節LR縄文を充填する。胎土に石英・長石粒を含む。中期・加曾利E 1式。4は深鉢形土器の胴部破片。ヘラ状工具による条線文。胎土に石英・長石粒を含む。5は浅鉢形土器の口縁部破片。口唇部が肥厚し、わずかに外反する。内面ともに無文地に赤彩が施されている。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。6も浅鉢形土器の口縁部破片。口唇部断面が尖り、くの字状に短く外反する。内面ともに無文地に赤彩が施されている。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。

## 2 石器（第18図7）

7は砂岩製の磨石の破片。長さ6.751cm、幅7.028cm、厚さ2.535cm、重量148.0gを測る。円錐素材とし、穂面の縁辺部に磨痕が認められる。

## 3 貝類（PL 6）

本遺跡において、明瞭な貝層は確認できなかったものの、有段竪穴建物上層の擾乱層から比較的まとまった貝殻が検出された。また調査区周辺からもわずかであるが、貝類を採集することができた。ここでは擾乱層および表面採集された貝類をまとめておく。

採集された貝類はわずかに4種である。有段竪穴建物上面擾乱層からは小型のハマグリがまとまっており、シオフキガイ、マガキ、アカニシが混入していた。擾乱層とはいって、本跡が中期・加曾利E 1式期に比定されており、少なくとも加曾利E 1式段階では鹹水域の環境が推定される。

なお、まとまっているハマグリの大きさは殻長2.38cmから4.24cm、殻高32.09cmから3.55cm殻があり、全体的には殻長3.0cm以下、殻高2.5cm以下の小型ハマグリが目立つ。またシオフキガイの大きさは殻長3.80cmから

3.95cm、殻高3.25cmから3.35cmがあり、ハマグリに比べやや大型である。そのほかにマガキやアカニシは破片であり、残存状況は不良で計測は不可能であった。

## 出土貝類遺体種名

二枚貝綱 Class Scaphopoda

イタボガキ科 Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

マルスダレガイ科 Veneridae

ハマグリ *Meretrix lusoria*

バカガイ科 Mactridae

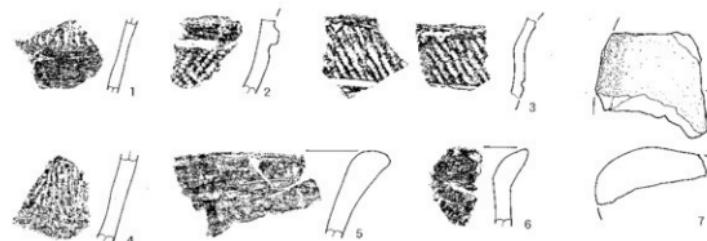
シオフキガイ *Mactra quadrangularis*

腹足綱 Class Gastropoda

アキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

(小川 和博)



第18図 遺構外出土遺物

0 1 10cm  
(1/3)

## 第Ⅲ章　まとめ

### 1　はじめに

今回調査対象となった沼田貝塚は、霞ヶ浦に注ぐ1級河川沼里川流域にあたり、南側の小野川や利根川といった大河川に形成された稲敷台地の南東側、標高28.5m前後の舌状台地に立地している。またここは南側の沼里川から入り込む小内溝と北側から入り込む小支谷が交差する位置にあたり、比較的広い平坦面と緩傾斜面が複雑に入り組み、起伏はあるものの、急傾斜地は見当たらない。現在正確には貝層の位置を確認できないが、その緩傾斜面の縁辺部に地点貝塚として存在していたものと推定される。

沼田貝塚の発掘については今までその履歴はなく、今回がはじめてであるが、実は周知されたのは古く明治時代のことである。周辺の貝塚には椎塚貝塚をはじめ、陸平貝塚、貝ヶ瀬貝塚あるいは大山柏の史前学研究所による小松川貝塚、センゲン貝塚や広畠貝塚など明治から昭和前半にかけて調査され、その後も学史的に標式遺跡など重要視される貝塚が数多くあり、これらと比べれば規模や出土遺物などその魅力に欠けていた遺跡であったのであろう。そのため、今まで規模や時期などその内容について明らかになったことはなく、地名表のなかだけで遺跡の所在が明記され続いているものと思われる。

### 2　沼田貝塚沿革史

沼田貝塚が遺跡として所在が明らかにされるのは、明治26年『東京人類学雑誌』の椎塚貝塚の発掘報告からである。そこには村田貝塚、台畠貝塚、蒲ヶ山貝塚等とともに遺跡名と地点が記載されている。ただし沼田貝塚としてではなく、「土岐屋敷跡貝塚」および「トキヤシキアト(地形図上に表記されている)」としてである(八木他1893)。この土岐屋敷跡貝塚が「沼田貝塚」と名称が改変されるのは、おそらく昭和34年酒詰仲男による『日本貝塚地名表』からであろう(酒詰1959)。その前に、昭和24年の調査で、昭和44年に刊行された清野謙次の『日本貝塚の研究』がある。そのなかで霞ヶ浦沿岸の貝塚群として稲敷郡石器時代地名一覧表があり、旧沼里村沼田地先内に8ヶ所の遺物散布地が掲載されている(清野1969)。あいにくこの地名表では沼田貝塚あるいは土岐屋敷跡貝塚としての名称はでてこない。狭い地域であり、8ヶ所のうち確実にどこかに相当するものと推定できるもの地名表のみで特定することができなかった。

さて、酒詰仲男の『日本貝塚地名表』は全国4,251ヶ所の貝塚が網羅され、茨城県内では241ヶ所が記載されている。ここには遺跡名に加え、異称名として別名称が列記されている。例えばこの沼田貝塚は異称「土岐屋敷跡貝塚」であり、村田貝塚は異称「白畠貝塚」「野畠貝塚」といった具合である。さらに所在地・現存否・自然遺物・歴度・文化遺物・編年・主要文献・地図・現地踏査(実査)等の詳細な記載項目があり、以後の貝塚研究の礎となるばかりか、今日作成される遺跡地名表の基本となっているもので、これ以上の遺跡地名表はいまだない。なお、沼田貝塚の項目欄には最も重要な事項である編年・出土遺物・歴度の項目が抜けており、今回の調査までそれら事項を正確に埋めることはなかった。

また、昭和41年の九学会連合による利根川総合研究の遺跡分布調査が実施され、対岸に位置する村田貝塚が早稲田大学西村正衛教授によって昭和43年11月に発掘調査が実施されている。報告は早稲田大学教育学部「学術研究」30と氏の集大成「石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—」のなかにまとめられているが、ここ沼田貝塚については「学術研究」30の遺跡分布図に地点が明記されている(西村1987)。

こうした経過のなか、県内で本格的な貝塚実態



第19図 沼田貝塚近景写真(『江戸崎町史』より)

調査が実施されるのは、茨城県歴史館における「県内貝塚における動物遺存体の研究」をテーマとする学術調査を嚆矢とする。昭和53年から同55年の三ヵ年行われ、現地踏査を中心とする地道な調査であった。これによって県内374ヶ所の貝塚の実態がほぼ把握され、将来を見越した保存・保護の指針を含めた基礎資料が整った。その成果については斎藤弘道氏における一連の報告がある（斎藤1981・1982・1998・2001）。そしてほぼ同時期の昭和54年には「茨城県史料一考古資料編—先土器・繩文時代」が刊行された。いずれも酒説仲男の地名表以来の画期的な調査であり報告である。しかし、沼田貝塚については十分把握されてはいないようで、時期を「後期」としているのみで、貝種や遺物の記載がないのは酒説地名表と同じである。その後斎藤氏は平成10年「茨城県の繩文時代貝塚(3)」のなかで貝種の項目においてはじめて「ハマグリ」と記載した。そして時期を「後期」としている。あいにく現地確認によるものか、誤記載かは不明で、出典根拠も明確ではない。

その以前の平成5年には「江戸崎町史」が刊行される。ここには遺跡名の記載があっても、遺跡の内容には全く触れていない。ただ、現在では全く見られない貝塚の近景写真が掲載されており、隣接する圓央道やバイパスの開通に伴って付近の景観が大きく変わりつつあることから、たいへん貴重な写真となっている(第19図)。そして平成11年に実施された埋蔵文化財包蔵地調査においてはじめて時期を「中期(加曾利E式)・後期」として認識される。台帳には「遺物の散布は広範囲にわたって多く分布し、貝も見られる」との所見があるものの、貝種の記載が漏れていったことはたいへん惜しまれる。

ここで茨城県歴史館が実施した貝塚実態調査において斎藤弘道氏が「茨城県歴史館報8」および「茨城県歴史館報25」で報告した「茨城県繩文時代貝塚地名表」のうち、稲敷市内(旧江戸崎町・新利根町・桜川村・東町)の貝塚地名表を掲載しておきたい。

表2 稲敷市内貝塚地名表

貝塚名	所在地	時期	主な貝種	備考
旧江戸崎町				
沼田貝塚	沼田字神田2077-6ほか	中・後期	ハマグリ、シオフキ、マガキ、アカニシ	
明神貝塚	大原字本松1248	後期	ヤマトシジミ	
三本松貝塚	大原字本松1248	不明		
吹上貝塚	法蓮坊甲526ほか	中～後期	ハマグリ、アカニシ	
村田貝塚	村田字後26ほか	中・後期	ハマグリ、オキシジミ、シオフキ	
村田貝塚III・IV	村田字後26ほか	前期後葉	ハマグリ	
南平貝塚	佐倉字後倉2350	不明		
山中貝塚	佐倉字後倉1509	不明		
小松川貝塚	佐倉字後倉896ほか	中～後期	ハマグリ	
椎塚貝塚	椎塚字の峯120ほか	後～後期	ハマグリ	
篠ヶ宮貝塚	篠ヶ宮	後期		
二つの宮貝塚	佐倉二つの宮	中・後期		
センゲン貝塚	佐倉センゲン	中・後期	ハマグリ	
高田岡貝塚	岡字大堀	後期		
台畠貝塚	台畠	後期		
神田道貝塚	小羽美神田道690	後期	ハマグリ、アカニシ	
蓮沼貝塚	高田蓮沼			
中根貝塚	高田中根			
駒塚	駒塚	不明		
中佐倉貝塚	佐倉字佐倉1779ほか	前期後葉	オキシジミ、シオフキ、アカニシ、ハマグリ	
旧新利根町				
下根本貝塚	下根本葛治屋台	後期	ハマグリ	
蓮寺寺貝塚	寺内中庭道成寺塙4231	後～後期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
伊佐津貝塚	柴崎字伊佐津	後期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
狸穴貝塚	柴崎字狸穴	不明		
田根川村				
大室貝塚	四葉字大室坪	中・後期	ハマグリ、サルボウ	
所作貝塚	四葉所作・山末	前・後期	ハマグリ、アサリ	
南貝塚	四葉	中～後期		
大門貝塚	四葉松の木	中～後期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
竜貝塚	阿波字竜具779ほか	後期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
石神下貝塚	阿波字竜具	中・後期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
広畑貝塚	同様出字広畑638	後～後期	ハマグリ、シオフキ、アカニシ	

貝塚名	所在地	時期	主体貝種	備考
前瀬貝塚	浮島前瀬3125	早~前 期		
岡ノ内貝塚	浮島岡ノ内	早~中 期		
貝ヶ塙貝塚	浮島字挾間久保2802	前 期	ハマグリ、アサリ、アカニシ、シオフキ、マガキ	
上の台貝塚	浮島上の台3275	早~前 期		
天神台貝塚	阿波天神台	後 期	ハマグリ	
塙原貝塚	古渡字塙原	後 期		
村坪貝塚	西箇村坪	中 期		
南貝塚	阿波南			
福田貝塚	旧東町 福田字神明前1674ほか	後~晚 期	ハマグリ、サルボウ	
西平貝塚	東半田839ほか	後~晚 期 中~後 期	ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ヒメシラトリガイ	

斎藤 1981~1998・2001より抜粋

### 3 貝相について

現在の沼田貝塚については、ボーリング調査を含め調査区周辺の緻密な踏査にも関わらず、その規模や位置関係について全く不明である。平成5年刊の「江戸崎町史」に掲載されている第19図の貝塚近景写真を見る限り、比較的明瞭な地点貝塚として確認できるものの、その撮影当時ににおける記録がない。今回の本調査において擾乱層および周辺から採集資料として、4種の貝類が確認できた。ハマグリ・シオフキガイ・アカニシ・マガキである。時期は阿玉台式期後半から加曾利E1式期に限定できそうである。

4種の貝類はいずれも湾奥泥底の干潟を生息域(松島1979)としており、少なくともこれら貝類は貝塚形成時における貝類採取活動の場、さらにその環境を如実に示しているといわれている。なかでもまとまっているのがハマグリとシオフキガイである。対岸の南1.3kmに位置する村田貝塚もほぼ同時期の貝類として22種確認され、ハマグリを最多として、マガキ、オキシジミ、シオフキガイが多く、サルボウ、アカニシ、カゲミガイ、アサリ、ベンケイガイ、イタボガキなどが報告されている。そして魚類としてはスズキ、クロダイを主体にマダイ、ボラ、エイが、哺乳類ではイノシシ、ニホンジカ、イルカ、ノウサギの他に人骨とイヌが出土している(西村1981・1989)。

沼田貝塚と村田貝塚は、支谷は異なるものの、羽賀沼一小野川一霞ヶ浦と連なる水系における漁撈活動の場として共有していることは明確で、わずか4種の確認であるが、村田貝塚と同様な状況を呈していたものと理解している。それはオキシジミの検出はできなかったものの、多出するハマグリ、シオフキガイ、マガキといった3種を確認していることからそれを傍証しているといえよう。なお、マガキについては本来岩礁性貝類であろうが、土浦市上高津貝塚出土のマガキの中に「礫に付着した個体が多く検出され」ており、これらは「あくまでも干潟内に存在した小礫に付着して生息していた(真貝1994)」との見解がある。当貝塚や村田貝塚出土のマガキも同様な環境下、すなわち遠方から運びこまれたのではなく、羽賀沼一小野川一霞ヶ浦水系において採取されたものと思われる。

さて村田貝塚における調査所見で注目されるのは、時期ごとに、貝殻等の廃棄地点を変えて、ひとつの貝塚を形成しているとの見解である(西村1981・1989)。これは沼田貝塚の成り立ちに対して示唆的である。少なくとも出土遺物を見る限り、加曾利E1式期段階では比較的狭い漁場を両造跡が共有していることになるが、その規模からみると村田貝塚がはるかに広い占有地を確保していたことになる。これらの現象は、単純にみて村田貝塚集団のおこぼれを沼田貝塚集団が分から与えられているようにみえ、そこには本村一分村、主従の関係が読み取れる。確かに村田貝塚は出土遺物の内容や量から判断しても周縁における中枢であったことは確実である。これを平等とする複数の集団とみるならば、明らかに物質量的な差がありすぎ、生産力の差とみることができ大きな問題である。これはあくまでも別集団としてみた場合であって、同じ集団と考えれば理解しやすい。すなわち、村田貝塚の形成にあたっては時期ごとに廃棄の場を移動させている事実から、沼田貝塚は谷を挟んだ村田貝塚集団による別の廃棄場であった可能性が推測できる。実は村田貝塚を廃村にした後、ここ沼田貝塚周辺に新たな拠点的集落が形成されており、ここ沼田貝塚は村田貝塚集団による新たな「進出」「移住」場所であった可能性が指摘できる。

### 4 有段竪穴建物の今日的課題

今調査において、いずれも部分確認であるが、3軒の竪穴建物が検出された。そのなかでS103と命名した1軒

がいわゆる有段竪穴建物である。その規模は上床部が南北軸5.5m、東西軸4.15mの長方形。下床部は南北軸3.17m、東西軸2.75mの長方形を有する。上床部の幅は68~150cm前後を測り、柱穴は下床部の隅に位置する4本隅柱である。上床部と下床部の壁高は13.5~23.5cmでほぼ垂直に掘り込まれている。焼土跡は残存しているが、掘り込みのある明瞭な炉跡はない。時期は中期後業・加曾利E1式期前業に比定される。これら建物構造の属性および所属時期すべて有段竪穴建物としての定義の範疇に収まり、異議を唱える余地はない。

つまり、有段竪穴建物の定義については今橋浩一氏における「二段床構造住居址」および中野修一氏における「有段式竪穴遺構」に集約される。それぞれ上下の床面に対する呼称は異なるが、「ベンチ部(テラス部)と称される上床部と、一段低く掘られた下床部の二段構造となっている(中野1985)」竪穴建物である。人類の建物形態として2万年の長期にわたり続けられる竪穴建物の歴史のなかでも、段をもついわゆる広義のベッド状遺構に分類される(宮本1990)竪穴建物との違いは、上床と下床部とが明瞭な比高差をもち、上床のほぼ中央部に下床部が掘り込まれる建物である。しかも時期だけではなく、その地域性が特定できるということをむしろ特徴といえよう。すなわち、阿玉台式期から加曾利E式期前半期という短期間に出現・盛行・消滅すること、ここ茨城県と千葉県を中心とする栃木県・埼玉県・東京都が分布圏内に括る構造は、例え今後縄文中期の拠点の大集落の調査が追加されても、これらの様相を書き改める必要はなく、明確な時間幅と地域範囲を限定できるのである。

最近県内の大規模調査において、この有段竪穴建物の検出が多くなってきている。かつて鈴木美治氏が県内の阿玉台式期の竪穴建物とともに有段竪穴建物を集成した(鈴木1984)10年後、茨城県教育財團縄文時代研究班が平成7年に10遺跡21遺構(縄文時代研究班1996)をまとめている。その後茨城県教育財團では、桜川市犬田神社前遺跡(柳原他2004)、茨城町宮後遺跡(和田他2005)で、さらに日考古研茨城による阿見町竹来遺跡(小川他1999)、土浦市六十原遺跡(小川他2003)、常陸大宮市西堀遺跡(小川他2009)の調査で有段竪穴建物を検出している。

実はこの有段竪穴建物についてはその独特な形態ゆえに研究の方向性に一貫性が欠如している。それは機能論が優先し、型式・形態論があり、系統論がある。機能論については川崎純徳氏(川崎1981)にはじまり今橋浩一氏(1985)によるまとめがある。多くはキーワードである『炉なし』という属性によって遺構の性格が語られる。それはその建物が人々の日常生活における居住基盤である「住居」と呼ぶべきかどうかといった基本的な問題である。最近でも石器の多出から「石器工房跡」説(後藤1996)。磨石類の出土から「食品加工場・厨房」説(柳原他2004)。さらには出産のための「産屋」説など、かつて今橋氏がまとめた諸説以後もいわゆる「非住居」説をとる論拠は根強い。しかし、現在の発掘調査では出土遺物あるいは床面の硬度などの状況証拠をもって機能の確たる証拠を得ることはほとんどできない。将来緻密な考古学データを重ね合わせ、さらに検証可能な自然科学分野における研究技術の発展に期待したい。また型式・形態論については鈴木美治氏、茨城県教育財團縄文時代研究班および谷口陽子氏における笠間市西田遺跡(谷口1996)の集成に集約される。一方系統論については中野修一氏説が卓越している。まずその起源を東北北部の円筒下層式期に求め、大木式土器・フラスコ状土坑との有段竪穴建物の「三点セット」が南下し拡散していく現象を「移住」によるものとした。この見解に対して今橋氏による問題提起がある(今橋1985)。また菅谷通保氏はこの移住について「肯定にせよ否定にせよ展開に乏しい。移住は、最も住居研究が直接的に觸れる問題(菅谷1999)」であるとする。これは建物のもつ性格から見よう見ま似的な「影響」「伝播」だけでは建物の設計図は正確には伝わらない。直に「移住」という形で設計図をもった集団が指揮して建ち上げられる性質のものであるからであろう。さらに茨城県教育財團縄文時代研究班が集成にあたって、その系統論について「認識の甘さから頻々に中野修秀氏の論を引用し、「有段式竪穴遺構は大木A式の住居形態が阿玉台式土器文化圏でも受容された」ものと捉えたが、隣接する福島県に現在までの出土例がないこと、阿玉台式の古い段階から有段式竪穴遺構が確認されていることから、この問題について今後の出土例の増加を待ちたい(縄文時代研究班1996)」との結論に至るなど中野説を直接的に否定している。

なお、これらの問題点に対し菅谷氏は「同時に存在する他類型の住居との関係を構造的に把握する必要性(菅谷1999)」があることを指摘する。となると鈴木美治氏が県内阿玉台式期の竪穴建物を集成した(鈴木1984)25年前における同時存在の多様性が改めて問題提起となる。ただし、共存する竪穴建物の時期決定における「土器型式」の設定が大きな弊となることもまた事実であろう。阿玉台各型式の吟味、また阿玉台IV式から加曾利E1式の中間ににおける中峰式(タイプ)、さらに大木式および勝坂式との関係、それらとの共伴関係がある。こうした時間軸の確立した段階

で堅穴建物の形態を併せてもじめて「住居(建物)型式」が成立するのであるが、「出土遺物の少なさ」「出土遺物の時期混在」などにそれらの必要条件はまだ整っているとは思われない。「広い時間幅で考えなければならぬものが多く」「各住居跡の時期が明確に位置付けることができない」(縄文時代研究班1996)とは正直な見解であろう。ただ大筋において阿長台式期から加曾利E1式期階段の建物形式を追うことは可能で、繰り返し述べている茨城県内における鈴木美治氏(鈴木1984)にはじまり、茨城県教育財団縄文時代研究班の集成(縄文時代研究班1995・1996)は少なくともこの有段堅穴建物について大きな成果をあげ、問題提起したことは事実である。

(小川 和博)

## 参考文献

- 浅川利一 2000『堅穴住居の空間分節』『古代史の論点② 女と男、家と村』小学館
- 阿部昭典 2007『縄文時代の「ベッド状遺構」の検討』『新潟考古』第18号
- 茨城県歴史館 1979『県内貝塚における動物遺存体の研究(1)』
- 茨城県 1979『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 茨城県歴史館 1980『県内貝塚における動物遺存体の研究(2)』
- 茨城県歴史館 1981『県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』
- 茨城県教育財団縄文時代研究班 1995『茨城県における縄文時代中期前半の住居跡の形態について』『研究ノート4』茨城県教育財團
- 茨城県教育財団縄文時代研究班 1996『関東地方における縄文時代中期の「有段式堅穴遺構」について』『研究ノート5』茨城県教育財團
- 茨城大学人文学部考古学研究室「常陸の貝塚」茨城大学人文学部考古学研究報告6冊
- 今橋浩一 1985『阿玉台文化の一侧面—二段床構造住宅址の検討—』『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版会
- 牛久町赤塚遺跡発掘調査会 1984『赤塚遺跡発掘調査報告』
- 江戸崎町史編纂委員会 1994『江戸崎町史』江戸崎町
- 大塚透郎 1986『日本歴史学界の回顧と展望』『史学雑誌』第95編第5号
- 小川和博・大瀬淳志 1999『阿見町竹束遺跡発掘調査報告書(第二次調査)』
- 小川和博・大瀬淳志・閔口潤 2003『六十原遺跡—宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 小川和博・大瀬淳志 2009『西宿遺跡発掘調査報告書』
- 川崎純徳 1977『茨城における貝塚研究の現状』『茨城県史研究37』
- 川崎純徳 1980『石岡市東大橋原遺跡—第三次調査報告—』石岡市教育委員会
- 川崎純徳 1981『いわゆる「ベッド状遺構」の諸問題』『常総台地』12 常総台地研究会
- 川崎純徳 1981『茨城県石岡市大作台遺跡発掘調査報告』石岡市教育委員会
- 川又清明他 2002『宮後遺跡1—やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告—II』茨城県教育財團文化財調査報告第188集
- 瓦吹堅 1973『田尻町上の代遺跡』日立市教育委員会
- 九学会連合 1971『利根川 自然・文化・社会』九学会連合利根川流域調査委員会
- 小林孝・飯島一生 1999『伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5—前田村遺跡J・K区』茨城県教育財團文化財調査報告第147集
- 清野謙次 1969『日本貝塚の研究』岩波書店
- 柳原雅彦他 2004『犬伏神社前遺跡I—北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告—VII』茨城県教育財團文化財調査報告第229集
- 後藤信佑 1996『根沢遺跡Ⅲ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第171集』栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 齊藤弘道 1981『茨城の縄文時代貝塚(1)』茨城県立歴史館報8
- 齊藤弘道 1982『茨城の縄文時代貝塚(2)』茨城県立歴史館報9
- 齊藤弘道 1998『茨城の縄文時代貝塚(3)』茨城県立歴史館報25
- 齊藤弘道 2001『茨城の縄文時代貝塚(4)』茨城県立歴史館報28

- 佐藤誠 1999 「Ⅲ. 縄文時代文化研究の成果と展望(1)遺構研究 古鬼怒海岸における貝塚研究」『縄文時代10』 縄文時代文化研究会
- 酒詰伸男 1959 「日本貝塚地名表」土曜会
- 酒詰伸男 1961 「日本縄文石器時代食料総説」
- 真貝里香 1994 「上高津貝塚A地点」慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9
- 菅谷通保 1999 「Ⅲ. 縄文時代文化研究の成果と展望(1)遺構研究 窪穴住居」『縄文時代10』 縄文時代文化研究会
- 鈴木裕芳 1980 『獣跡遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会
- 鈴木美治 1984 「阿玉台式期における窪穴住居跡の形態についての一考察」『年報3』茨城県教育財団
- 高根信和他 1981 「下広岡遺跡調査報告」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』茨城県教育財団
- 竹下次作 1940 「鳩崎村センゲン・小松川貝塚」『史前学雑誌』第12巻第2、3合併号
- 谷口陽子 1996 「5 有段式整穴遺構の位置づけ」『笠間市西田遺跡の研究』筑波大学歴史・人類学系
- 常木晃 2004 「第1節 稲荷山遺跡の縄文時代集落について」『稲荷山』大栄町教育委員会
- 鳥居龍藏 1899 「常陸上越貝塚より発見の人頭大脛骨に就いて」『東京人類学会雑誌』第14巻第156号
- 中野修秀 1985 「有段式整穴遺構に関する観書—関東地方縄文中期における異系統の窪穴住居址—」日本考古学研究所集報VII
- 中野修秀 1987 「有段式窪穴遺構再考—新資料の検討とコメントを中心として—」日本考古学研究所集報IX
- 西村正衛 1960 「利根川下流における縄文中期文化の地域的研究(予報)」『古代』第34号
- 西村正衛 1964 「縄文文化地域研究の基礎的概念—利根川下流域の研究を中心として—」早稲田大学教育学部『学術研究13』
- 西村正衛 1966 「茨城県福敷郡浮島貝ケ塚貝塚—東部関東における縄文前期後半の文化研究その三—」早稲田大学教育学部『学術研究15』
- 西村正衛 1968 「利根川下流における縄文草創期から中期の遺跡分布とその文化の特殊性—主として人工遺物の性格—」『人類科学』20集
- 西村正衛 1971 「利根川下流における縄文文化編年的研究の概要」『利根川』
- 西村正衛 1979 「村田貝塚(第IおよびII地点)」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 西村正衛 1981 「茨城県江戸崎町村田貝塚(第一次調査)」早稲田大学教育学部『学術研究30』
- 西村正衛 1989 「18. 茨城県江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として』早稲田大学出版部
- 原田昌幸 1986 「阿玉台式土器前半期の一様相—常磐道柏地区の調査成果から—」『研究紀要』10 千葉県文化財センター
- 吹野富美夫他 1999 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4—前田村遺跡G・H・I・K-1」茨城県教育財团文化財調査報告第146集
- 松島義章 1979 「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」『第4紀研究』17-4
- 宮本長二郎 1983 「関東地方の縄文時代窪穴住居跡の変遷」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 宮本長二郎 1990 「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』第32号
- 宮本長二郎 1996 「日本原始古代の住居建設」中央公論美術出版
- 八木獎三郎他 1893 「常陸国椎塚介塚発掘報告」『東京人類学会雑誌』第87号
- 和田清典他 2005 「宮後遺跡2—やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告—Ⅲ」茨城県教育財团文化財調査報告第240集

# 写 真 図 版



1 遺跡遠景



2 調査区全景



3 基本層序



1 窪穴建物SI01



2 窠穴建物SI02  
3 有段窪穴建物SI03  
4 有段窪穴建物SI03出土遺物  
5 有段窪穴建物SI03掘形





1 土坑SK01



2 土坑SK02



3 溝SD01

PL4



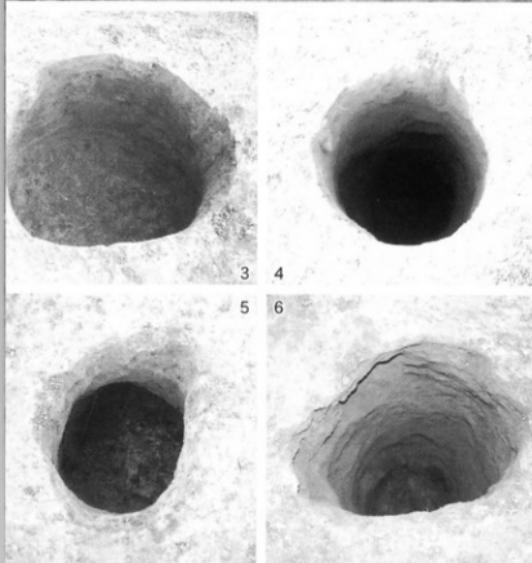
1

1 溝SD02



2

2 溝SD03



3

4

5

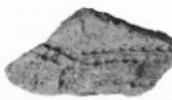
6

3 柱穴P-1

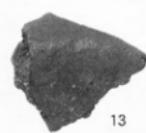
4 柱穴P-2

5 柱穴P-3

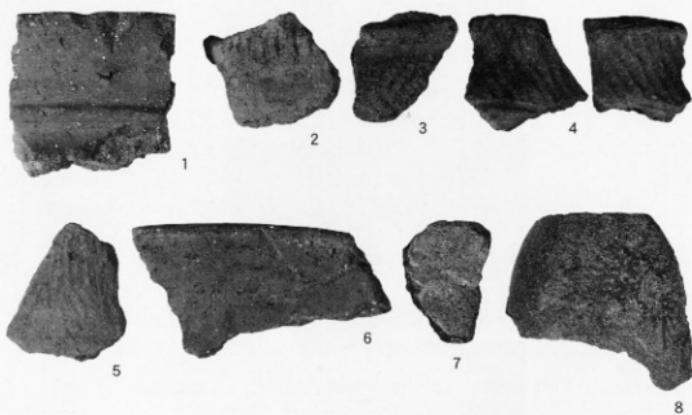
6 柱穴P-4



1 ~ 3 SI02  
4 + 5 SI03



6 ~ 11 SK01  
12 + 13 SK02



1 SD01 2~8 表採資料



沼田貝塚出土貝類 (表採資料)

報告書抄録

**茨城県稻敷市  
沼田貝塚発掘調査報告書**

---

平成22年（2010）6月30日 発行

編集 有限会社 日考研茨城  
茨城県稻敷市佐倉3321-1

発行 有限会社 日考研茨城  
稻敷市教育委員会  
茨城県稻敷市八千石18-1 TEL. 0299-79-3211

印刷 有限会社 田辺印刷  
茨城県稻敷市佐倉3321-5

---